加　齢　と　衣　環　境 (2)

海を渡った人たち　―その２―
由上美枝子の場合

金　森　範　子

１．はじめに

前回は、遭難によって偶然に日本とサンフランシスコを往来し、見事な記録を残したジョセフ・ヒコこと浜田彦蔵（1837～1897）と、予備知識を持って渡米し衣環境について興味ある記録を残していた新渡戸稲造（1862～1933）に焦点をあてた。今回はその延長線として、1900年代に仏教開教使の妻としてエンゼルアイランドに一歩を踏み入れた由上美枝子の生涯に絞った。私と交信した10年間の手紙を軸としているので、未公開のものばかりである。鈴木大拙博士（1870～1994）についての記録は貴重なもので、博士の年表のどこにも見られないアメリカ滞在の足跡が書かれている。自分の浅学を思い知らされる情報が次々ともたらされ、手紙を貰う毎に本を買い占めた。私の老後はそれらの本に目を通せると考えただけで幸せになる。それに耐えうる健康の維持が課題ではあるが。

ここで取り上げているのは、美枝子の類い稀な人生の中から、無理に目を凝らしたような小さな点、「衣環境」についてのみである。少し残念である。いずれは手紙すべてを整理して、５人の子たちに贈りたいと思う。私の手元には一切残さないつもりでいる。

２．ハワイ島ヒロ

1990年２月、本学主催のハワイ大学ヒロ校での第５回語学研修に同伴した。その折、キャンパスの日系人や、ヒロタイムスの社長大久保清と知り合った。大久保は、第二次世界大戦中アメリカ兵士として出兵した若者の話や、関東大震災の折りに次々と援助物資を送ったことを熱っぽく語り、岐阜は提灯と鵜飼だけじゃないかとなぜか挑発的だった。悔しかったら岐阜出身の移民がいるか探してごらんとまで言った。と言いながらも、ハワイ語辞典やカラカウア王が日本を訪問した時の珍しい小冊子を、大切なものだけどと言いながらくれた。移民について無知だった私は、現地で資料を買い込んだ。帰ってから、明治村のハワイから運ばれたという移民館に行った。そこには大久保の話に聞いた通り、住民に時を告げる、左程大きくはないつり鐘があった。

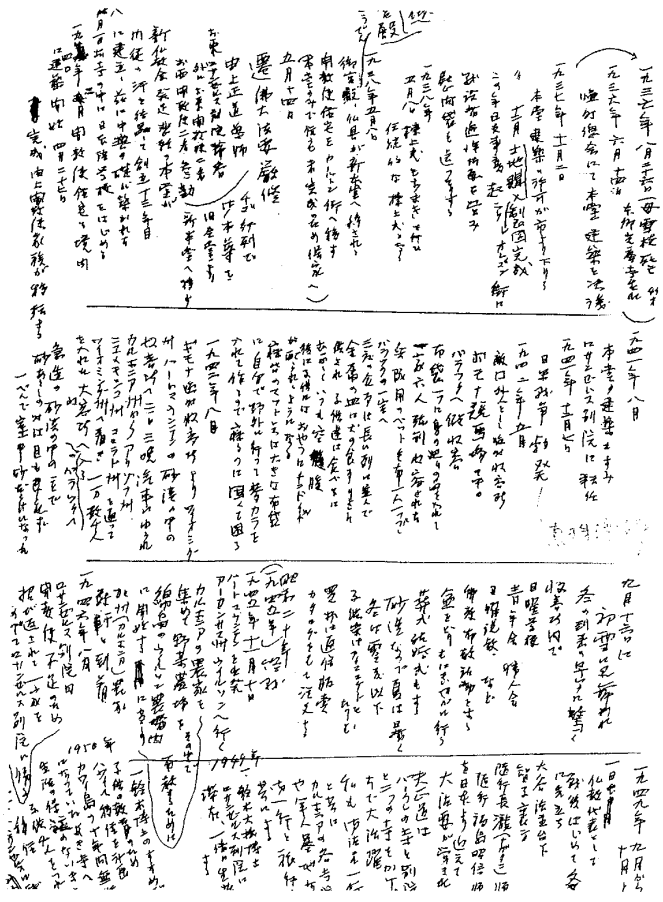
３．由上美枝子との出会い

1985年、美枝子とその長男周行は、美枝子の伯父の50周忌に参列のため、アメリカから岐阜県揖斐郡池田町の光慶寺に来ていた。近親者が集まった中に金森毅がいた。毅を通じて美枝子の存在を知り、ヒロで聞いた移民の話が気になっていた私は、当時アメリカにいた金森卓に、美枝子を訪問してほしいと依頼した。そうした経緯で、美枝子との文通が1991年から始まった。私の知りたいという欲望と、誰かに伝えておきたいという美枝子の意思が合致した。滞りがちな私の返信を快く受け止め、質問に対して、的確で分かりやすい文章が戻ってきた。10年間に交換した航空郵便は、約200通に及ぶ。

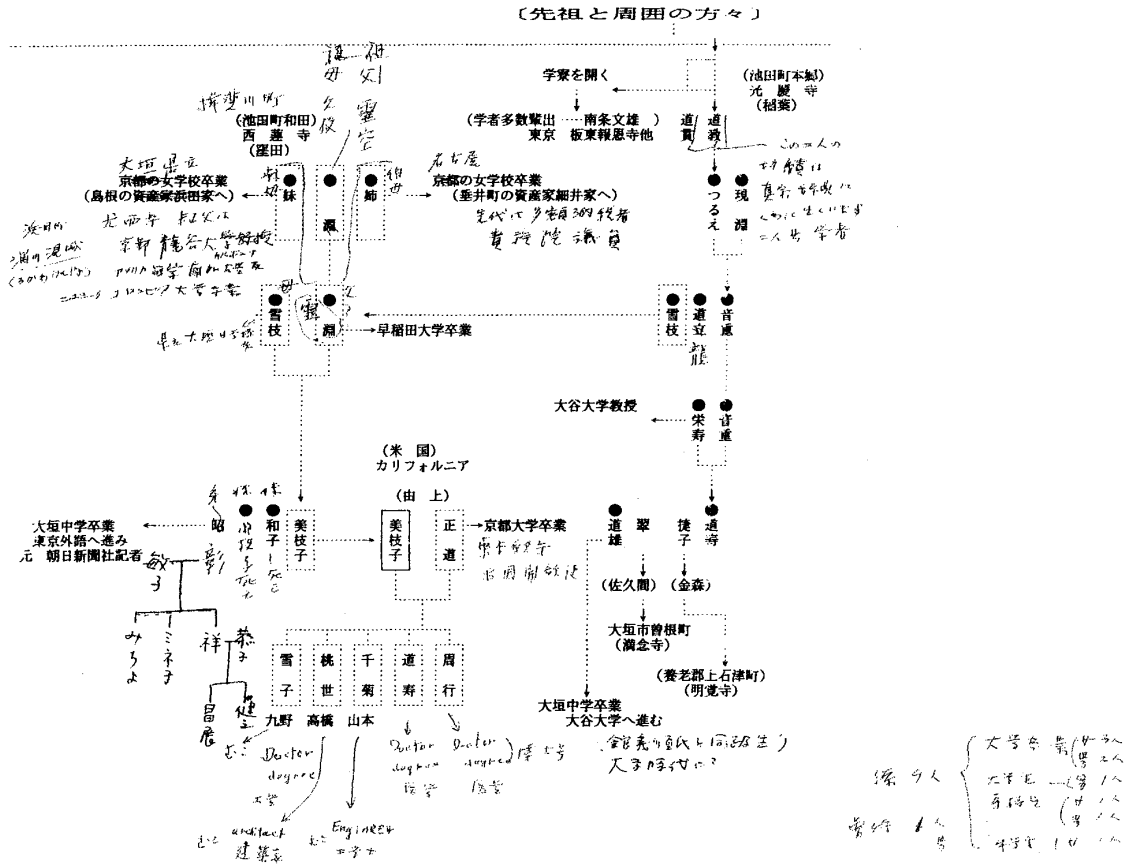
4．年表の作成

しばらくして私は、年表の作成を提案した。折り返し、自分の足跡を１枚の紙にびっしり書き込んだ手紙が届いた。一読して興奮した。何と言う人生。

その原稿の言葉使いをそこなわないよう、年表風に並べて美枝子に送り返し加筆訂正を依頼した。英語はすでに堪能だったが、日本語の横書きは出来ませんと特別な時以外は縦書きだった。そんなことを数回繰り返して出来上がったのが由上美枝子の年表である。この年表には山程の情報が織り込まれている。ここからの記述は、この年表を軸としている。



手紙１　美枝子から届いた年表に関する最初の原稿



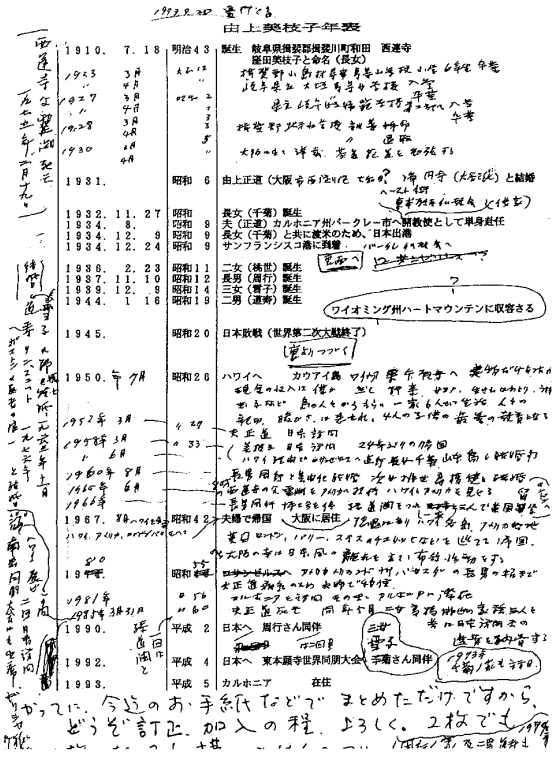
手紙２　系譜のやりとり。美枝子が添削。

由上美枝子の年表（1993年作成）

西　暦	年号	美　枝　子　の　周　辺
1910.7.18	明43	誕生　岐阜県揖斐郡揖斐川町和田　西蓮寺 窪田美枝子と命名（長女）
1923.3.	大12	揖斐郡小島村尋常高等小学校　　小学6年生　卒業
1923.4.	大12	岐阜県立大垣高等女学校　入学
1927.3.	昭2	岐阜県立高等女学校　卒業
1927.4.	昭2	岐阜県立岐阜女子師範学校第二部へ　入学
1928.3.	昭3	岐阜県立岐阜女子師範学校第二部　卒業
1928.4.	昭3	揖斐郡北方小学校訓導　辞令
1930.3.	昭5	揖斐郡北方小学校訓導　退職
1930.4.	昭5	大阪に出て洋裁・茶道・華道を勉強する
1931.	昭6	由上正道と結婚。大阪市西淀川区大和田　浄円寺（大谷派）
1932.11.27	昭7	長女（千菊）誕生
1934.8.	昭9	夫（正道）カルホニア州バークレ市ヘースト街東本願寺仏教会開教使として単身赴任（借家）
1934.12.9	昭9	長女（千菊）と共に渡米のため、日本出港
1934.12.24	昭9	サンフランシスコ港に到着　バークレ仏教会へ
1936.2.23	昭11	二女（桃世）誕生
1936.6.14.	昭11	臨時総会にて本堂建築を決議
1936.8.26	昭11	母　雪枝死亡（本郷　光慶寺生まれ）　44歳
1937.11.2	昭12	本堂建築の許可が市より下りる（12月オレゴン街に土地購入製図完成）日支事変起こり戦没者追悼法要を営み慰問袋を送ったりする
1937.11.10	昭12	長男（周行）誕生
1938.5.8	昭13	棟上式・もちまきを行い、伝統的な棟上式となる 御宮殿　仏具が新本殿へ移される 開教使住宅をカールトン街へ移す（本堂のみで住まうも未完成のため借家へ）
1938.5.8	昭13	遷佛大法要厳修 由上正道　導師 お東　ロサンゼルス別院輪番 外にお東開教使2名 お西開教使2名　参勤 稚児行列で御本尊を旧会堂より新会堂へ移す ＊新仏教会発足　　悲願の本堂が門徒の汗を結晶して創立13年目に建立　ここに中興の礎が築かれた
1938.8.1	昭13	お寺の中に日本語学校をはじめる
1939.12.9	昭14	三女（雪子）誕生
1940.2.	昭15	開教使住宅を境内に建築開始
1940.4.27	昭15	開教使住宅完成　由上開教使家族が移転する
1941.8	昭16	本堂の建築もすみロサンゼルス別院に転任
1941.12.7	昭16	＊日米戦争　勃発　　真珠湾攻撃
1942.5.	昭17	敵国外人として臨時収容所ホモナ競馬場の中のバラックへ仮収容　布袋ひとつに身の廻りの品を入れて一家6人強制収容された 兵隊用のベット毛布一人一つで　バラックの一室へ 三度の食事は長い列に並んで　金属の皿に犬の食事のように供され　子供達は食べるにむつかしく、いつも空腹 後に　子供にはおやつにサンドイッチが配られるようになる　寝台のマットレスは大きな布袋に自分で野外に行って麦殻を入れて作るので寝るのに固くて困る
1942.8.	昭17	ホモナ臨時収容所よりワイオミング州ハートマウンテンの砂漠の中の収容所へ。　三日三晩汽車にゆられカルホニア州へ着き一万数千人を入れた大収容所のバラックへ入る。急造の砂漠の中のことで、砂あらしの時は目もあけられず、一ぺんで部屋中砂だらけになった。
1942.9.16	昭17	初雪に見舞われ冬の到来の早いのに驚く。 収容所内で、日用学校　婦人会　日曜説教など仏教布教活動をする。 盆踊りもにぎやかに行う。葬式　結婚式もする。 砂漠なので夏は暑く冬は零度以下。子供等はアイススケートをたわむ。 買い物は通信販売。カタログを見て注文する。
1944.1.16	昭19	二男（道寿）　誕生
1945.8.15	昭20	＊終戦
1945.11.7	昭20	ハートマウンテンを出発。アーカンサス州ウイルソンへ行く。カルホニアの農家を集めて野菜農場を綿畠のウイルソン農場内に開始するに当たり、その中で布教するために加州（カリホニア）農家と到着。
1946.8.	昭21	ロサンゼルス別院内の開教使不足のため招き返されて、一家をあげてロサンゼルス別院に帰る。

西　暦	年号	美　枝　子　の　周　辺
1949. 9.	昭24	9月から10月と、仏教代表として、戦後はじめて各宗に先立ち、大谷法主台下・智子裏方・随行長瀧（ナガタキ）師・随行福島昭信師を日本より迎えて大法要が営まれる。夫正道はバークレの寺と別院と二つの寺をかけ持ちで大活躍。 私も御法主一行と共にカリホニアの各寺院や軍人墓地など旅行を共にする。
1949.	昭24	鈴木大拙博士ロサンゼルス別院に滞在、一緒に生活する。
1950. 7.	昭25	鈴木博士のすすめで、子供の教育のためハワイへ移住を計画。カワイ島の10年間無住になっていた空き寺へ生活の保護のないまま子供４人を連れて移住。長女ひとりロサンゼルスに残る。 ワイアナ東本願寺へ。建物だけがあった。現金の収入は僅か。然し、野菜・サカナ・生きたニワトリ・ウサギ・玉子などを島の人々からもらい、一家６人が生活。人々の親切、暖かさに恵まれ、４人の子供の最善の教育となる。
1952. 3.	昭27	夫正道　　日本訪問
1958. 3.	昭33	美枝子　日本訪問　24年ぶりの帰国。
1958. 6	昭33	ハワイ経由でロサンゼルスへ直行。長女千菊　山本喬と結婚する。
1960. 8.	昭35	長男（周行）と美由紀結婚。　二女（桃世）高橋健と結婚。
1963.11.	昭48	三女（雪子）　九野拓と結婚。
1965. 6.	昭40	80才の西蓮寺の父霊淵をアメリカへ招待　ハワイとアメリカを見せる。
1966.	昭41	長男（周行）　博士号を取得　　孫（道潤）をつれて一家三人で英国留学。
1967. 8.	昭42	夫婦で帰国　引退に当たりハワイ各島、アメリカ各地、英国ロンドン、パリ、スイスのチュリッヒなどを巡って帰国。のち、大阪の寺に日本風の離れを建てて布教活動をする。
1973.	昭48	千菊一家も訪日
1975. 2.19	昭50	西蓮寺　父死亡
1976.	昭51	二男（道寿）リン・スコットと結婚（ボストンの医者の娘）
1979.	昭54	周行一家、及二男（道寿）も訪日する。
1980.	昭55	アメリカ　メリランド州バセスダの長男の招きで、夫正道病気のため夫婦で移住。
1981.	昭56	カルホニアを訪問、そのままカリホニアに滞在。
1985. 3.31	昭60	＊夫正道死亡
1985. 5.	昭60	二女高橋桃世の家族三人と共に日本訪問。夫の遺骨を納骨す。 ・一回は孫（道潤）と訪問 ・ハワイ及びブラジル南米同朋会にも出席。ギリシャ旅行など。
1990.	平２	訪日　長男（周行）同伴
1992.	平４	訪日　東本願寺世界同朋大会　二女（雪子）同伴
1993.	平５	カリホニア在住
2001. 6.	平13	美枝子　死亡（この行のみ2001年に記入）

写真１　美枝子82歳の誕生日
Rancho Palos Verdes, CA にて



手紙３　年表作成過程。加筆訂正は美枝子。

5．渡米のいきさつ

次の文章は、文通を始めてまもなく美枝子から届いた。少し長いが、美枝子を理解するために欠かせない記録なので、そのまま掲載する。

「私は岐阜県の真宗寺院に生れ育ち、同じ大阪の真宗寺院に嫁いだ。そして結婚3年目に夫が京都の本山から北米開教使の辞令を受けて、1934年8月に、カリホニヤ州バークレーの東本願寺佛教会へ単身赴任した。その後、私は夫の呼び寄せで満2才の長女を連れて渡米する事となった。夫の出発後4ヶ月目の12月9日に日本郵船の秩父丸で神戸港を出帆した。今から61年前である。夫は寺の長男で京都大学で印度哲学を学び仏教伝導を一生の仕事とし、熱心に佛書を読み、本山の伝導講究院などに入って活動していた。当時夫には2人の弟と2人の妹があり、舅姑はまだ50代でとても良く出来た人たちであった。私を自分の娘以上に大切にしてくれていた。アメリカ行きに当って、舅は『3年間だけアメリカ留学のつもりで行ってくれるように、その間に弟や妹を結婚させたりして片付けておくから、お互いに3年間辛抱して頑張ろう』と励ましてくれた。神戸港を出て2週間12月24日船はサンフランシスコ港に到着した。夫が船に上がって来て、娘に大きな西洋人形や英語の絵本など持って来て、面会をよろこびつつ、上陸の手続をしようとすると、役人がクリスマスの前日のため、帰ってしまっていて、私の上陸は不可能となった。しかたなく、夫は船から降りて帰って行き、私と娘は船に残された。やがて暗くなって、夜の海へ大きな船から縄梯子で小船に移され、数人の男たちと共に真っ暗なサンフランシスコ湾を波に揺られながら移民の島エンゼルアイルランドへ連れて行かれた。全く悪夢を見ているようであった。エンゼルアイランドは花咲き鳥歌う美しい景色の楽園のような島であるが、移民たちにとっては不安と絶望の島でもある。大きく立派な建物がいくつもあって、男たちの居るのは遠くで、私の部屋は広いところで、沢山の無人のベッドがならんでいて、ずっとむこうにフィリピン人らしい女が1人だけ居た。一寸離れたところに中国人らしい女や子供が沢山長い滞在らしく慣れた様子で洗濯などしていた。私の部屋の係りは1人の白人の女で、夜なのでもう休むためか、ガウンを着て長い髪を編んでうしろに垂らしていた。自分の腕時計を指しながら、起床・食事の時間などの説明をした。翌朝起きて食堂に行った時、日本人らしい男たちが遠くに居たが語りかけることは出来ない。

食事は堅いパンと黄色い粟のお粥の様なものであった。ご飯がほしいと言うと中国風のパラパラの冷や飯をくれたのでお湯をもらって湯漬けにして食べた。昼か晩かに赤豆を塩味に煮たものが出た。部屋に帰って2才の娘が大阪言葉で『お母ちゃん、豆さんおいしかったね』と言った時は涙が出た。2才の娘以外に誰も話しかける相手も無く英語が分からぬので外部と連絡をとる方法もなく、不安の只中に居る時、広い廊下には立派なクリスマスツリーが華やかに飾られ、クリスマスの音楽がいつも流されていた。又夜寝静まるとカンカンと金属を叩くような音がして、眠りを妨げた。あとから聞くと暖房のためパイプの中を蒸気が通る時に発する音らしい。何年か後までクリスマスツリーを見、あの音楽を聞くと、あの時のやり場の無い不安を思い出した。部屋の壁には前に入っていた日本人が書いたらしい落書きがあり、『不安』『絶望』『焦燥』などの文字があり、一層不安が増す。私と娘は医務室へ連れて行かれ、看護婦のような女から身体検査を受けた。次の朝私に係の女が、あなたは今日、サンフランシスコへ行く事が出来る。むこうに着くとあなたの夫がそこに来ていると告げた。いよいよ島を出ようとすると空は晴れて明るく、真っ暗な海を小舟で来た時と違い、大きな綺麗な船に知らない人ばかり10数人が乗り込んでサンフランシスコへ向かった。港の桟橋には夫と仏教会の理事長夫妻が待っていて下さった。理事長の車に乗せて頂き、対岸のオークランドへ渡る桟橋

へ行く。大きな建物の中へ入った。そこには店があり、車から降りて海を見たり、飲み物やお菓子など買う事が出来た。気が付いてみると、私たちはいつの間にか渡し船の中に居るのであった。」こうして一家のバークレー仏教会の日々が始まった。

6．訓導・稽古ごと

1910年7月18日岐阜県揖斐郡の西蓮寺に、長女として生まれた美枝子が、揖斐郡北方小学校の訓導をしていた記録は、今も北方小学校に残っている。

「私は18歳の時、もう師範の二部を出て小学校の訓導でした。本当になにも分からぬままで一人前の43円の月給をもらいました。男の先生が45円校長が80円、代用教員の師範を出ていない先生は男女とも30円の月給でした。揖斐の河原で砂の小石を分ける女の人夫の日給が20銭、私のはく女下駄1足20銭でした。盆と暮にボーナスもありましたが1銭も使わず全部あづけていました」その頃、師範学校で学ぶと義務年限があり、美枝子は1年学んだので、1年4ヵ月の義務があり2年つとめた。その後、昭和5年4月から大阪で洋裁と華道と茶道に励んだ。

洋裁は「堂島ビルディング（通称堂ビル）洋裁学院へ入学。校長はお名前を忘れましたが男性の方で年配の方。アメリカ帰りの新進の人でした。」とある。日本の洋裁は、紳士服から婦人服へと発展しているが、初期の技術習得者も圧倒的に男性である。そのあたりのことは、「銀座の米田屋洋服店　時代と共に歩んだ百年」 柴田和子著　に詳しく、関西と関東との業者の交流についても述べられている。この時代に洋裁を学んだのは進歩的な花嫁修行であったが、自分の未来にアメリカ移住があるとは想像していなかった。

7．Wash tub

美枝子は書いている。「結婚する前は、特に女学校時代はほとんど着物でした。夏は単衣（ひとえ）秋はセルとかあわせ、冬は綿入れの木綿のめいせんまがいのニコニコ絣（にこにこがすり）と言う織物で、自分で縫ったり母が縫ったりでした。女学校で制服がはじまり、それもサージの布（きれ）で裁縫の時間に自分で縫いました。然し冬は寒いので着物に袴をはいて通学しました。結婚してからも夏だけは洋服らしいものを着ましたが、あとは着物でしたので台所の水仕事や煮炊きは大へんでした。大きな木の盥（たらい）にポンプで水を汲み入れて地面の上で洗い一ぺんずつ重い盥の水を手でもちあげて流すので着物の裾がぬれてとてもとても大仕事でした。アメリカに来て、洗濯は家の外側の壁にそってワンタブ（wash tub）と言って洗濯盥がセメントの箱のようなもので作ってあり、上には水道の温水と冷水が出る蛇口があり、箱の下にはゴムの栓で開け閉めができとても便利なのに驚きました。日本の洗濯好きの母に第一にあげたいものでした。又昔の日本の道は小石と泥でしたので、靴は皮のはすぐだめになりゴム靴や、下駄をはいて通学しました。日和（ひより）下駄で遠足に行ったこともあります。夏休みには着物や袴を洗って縫いかえしました。」

1934年、日本からアメリカに渡った第一印象として、温水と冷水が出る事をあげている。1945年の終戦直後の日本では、まだ大きなたらいと洗濯板とソーダ石鹸だった。日本とアメリカの暮らしの差は、道路、上水道、下水道といったことに現れ、女性の家事労働の量と関連している。アメリカではクリーニング業が家事産業として早くからあり、移民の職業のひとつとしても有名である。

8．バークレーでの出産・育児

開教使の妻として、二男三女の母として、寺院の建立などその暮らしは大変だったようだが、子達を優秀な人材として世に送り出している。

「長女は岐阜に帰って西蓮寺で初産をしたのですが、家へ産婆さんが来て昔通りのお産

でした。二女の時は、小さなバークレーの町にも僅かな日本人のために日本婦人の産婆さんが自宅で産院をしておられ、その方の家へ行って一室でお産をしました。そして主人は何もしたことがないので上の娘、長女3才も産婆さんの世話になり、私と同じ部屋で寝て私と食事をさせてもらいました（そのとき1人分が3ドルでした）夫は寺に残って近所の家庭で食事をさせてもらうよう頼みました。この産婆さんは和歌山県出身の丈夫な婦人で・・こうして3番目の長男の時は上の子2人も連れて行き、4番目三女の時は上の子3人も連れて行き、全部世話をしてもらいました。そのかわり家に帰った時は何もかも私1人でやらねばならぬので大変でした」とあり日系社会の姿がわかる。イギリスなどで、産婦の部屋に家族も一緒に食事できるテーブルがあったりするので、同じ発想かも知れない。「育児もバークレー市にはベビーの育て方を教えるところがあって、そこへ赤ちゃんを連れて行くと赤ちゃんの育て方・ベビーフードの食べさせ方・その他病気の手当てのしかたなどいろいろ教えてもらえるようになっていて医師や看護婦が来てその集まる日が決まっていて、赤ちゃんを乳母車で押して若い母たちが集まり楽しかったものです。（その集まりをベビー・カンファレンスと言っていました）」と書いている。

9．強制収容所

強制収容所のくらしについては、年表の中にも書き込まれているので、それ以外のことについて書き加えたい。「私がカルホニアの仮収容所ボモナからワイオミング州ハートマウンテンへ送られました時、私たちは名前でなく番号で呼ばれるようになりました（23002）番となり荷物などにも名前をつけず全部ファミリーナンバー（23002）でした。あたかも罪人のようです。しかし汽車は私が2歳以下の三女を持っていたので寝台車に（プルマウン車）乗せられ、寝られて3夜つづく乗車をいたしました。時には座ったままで疲れた主人や他の子供と変わって寝台に休ます事も出来ました。私は寝台車など高級なものに乗ったのは、これが一生に一度のことでした。」と述懐している。

・収容所での出産

美枝子には強制収容所での出産という貴重な経験がある。「5番目の二男の時は収容所ハートマウンテンでしたので立派な病院で医者や看護婦にまもられてお産をし、家の方は長女が12才くらいだったし収容所内なので食事は食堂に行くだけなのであまり心配なく産後も看護婦に毎日シーツを替えて貰い体をふいてもらって無料（官費）で病院のお産を体験しました。」「戦時、収容所で子どもが生まれるという事はさすがアメリカの豊かさと言うのでしょうか」「二男の出産の時のことですが、収容所の中では妊娠の婦人には特別によくしてくれて、毎朝、グレープフルーツなどの特別の果物が与えられ牛乳も一般には粉乳をとかしたものですが妊婦には毎日1コート（5合）のその日のしぼり立てのビンに入った牛乳が与えられました。又生まれる前に赤ちゃん用のおしめ、毛布、ベビー服などおむつにつけるセーフティピン（安全ピン）までそろえて支給されました。そしてベビーの生長に従ってベビーフードなど一杯支給されました。医者代、病院代も無料ですし本当に恵まれてアメリカなればこその経験でした。」美枝子の手紙に、日本とアメリカを比較するような言葉は殆んどない中で、収容所での出産に関しては違っていた。乳幼児や妊産婦に対してのアメリカと日本の基本的な違いをみる。

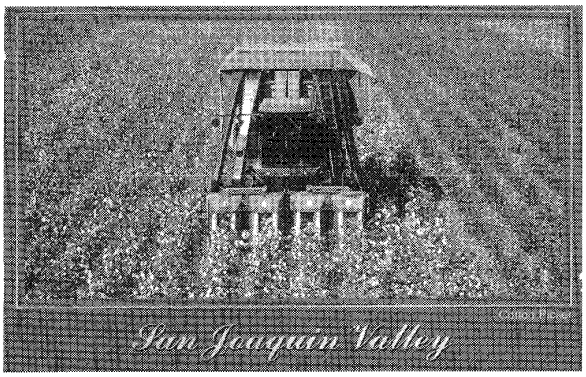
・通信販売

収容所では毎月衣服費として、1人に3ドル余り政府から出ていて充分だったと言う。「行くところもなく、ただ3度の食事に食堂へ行き、洗濯場へ洗濯に行き、子供等はバラックの学校へ通うだけで、冬の暖かいマントを一度それぞれにオーダーメールで貰っただけで、外出は頭を大きいあたたかいスカーフで

包んでいました。結婚式も無く、葬式はちょっと黒っぽいものを着て参ったと思います」と書いている。収容所の中で、通信販売が行われていた。個人で出来る可能性が違っていた。日本の通信販売は、もっと先であった。

10. 戦後

1945年（昭和20年）、ハートマウンテンの収容所を出て、一時期アーカンサス州ウイルソン農場で綿つみ作業をしたという。大きな袋を引きずって綿を摘み、賃金は安く重労働であったようだ。その後ロスアンゼルスの仏教会に戻るが、そこで鈴木大拙が一家のもとに逗留することになる。そして、年表にあるようにハワイのカワイ島・ワイアナ東本願寺へ移る。この事は、別の折にもう一度考察したい。



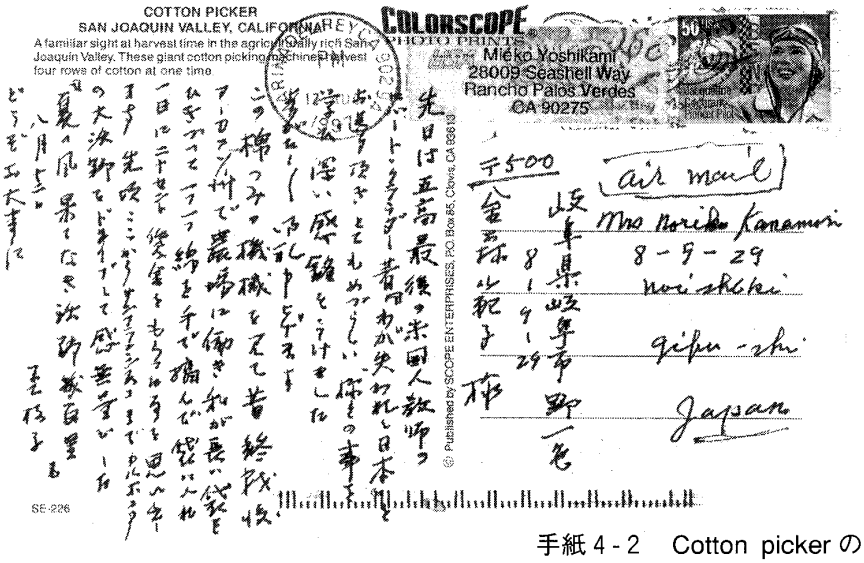
手紙4-1　Cotton pickerの絵ハガキ
この機械を見て、戦後の綿つみを思い出したという。

11. 日常のこと

・装い

1958年に美枝子は、長女の結婚式をハワイであげている。その時の装いはカクテルドレスで、ヘアドレスや手袋もつけ正式な装いである。その当時の日本では、父親の洋装はあったが、母親は殆ど和服であった。彼女が日本だったらと考えると、環境による違いが歴然としてくる。彼女の子達は、それぞれ大学などで知り合った日本人と結婚しているが、孫になると、美枝子の言葉を借りれば白人と結婚している。そのひとりの結婚式は、本人たちの希望により得度を受けた長男が司祭となり、仏式で行った。手元にある写真で見ると、美枝子の服装は明るい花柄で、彼女が来日した時に着ていた洋服からは想像も出来ない。私が1996年に会った時はグレイの地味な服で（東海女子短期大学紀要　第23号　p.42写真）1993年に来日の折のものと同じである。彼女の日本での装いは日本の基準に合わせたものに違いない。

茶道具などは旅に出る時も一式持ち歩いたが、服装についてはこだわらなかったようである。但し、食については私でさえやっていないような日本の正月料理を続け通し、一方でアメリカの食習慣も上手に取り込んでいた。



手紙4-2　Cotton pickerの絵ハガキの裏面

・俳句

彼女は平成５年、大垣市主催の第5回全国俳句大会にアメリカから投稿し「夏雲のはや五大湖を一またぎ」という句で特選をもらった。また、彼女は西海岸俳句会で詠んできた句を中心に句集「沙羅雙樹」を自費出版している。米寿を記念して88句を収録、長男夫婦が編集した。美枝子（俳号美濃女）の自筆の日本語に、ローマ字と英訳を添えて１ページを構成し、美しい空間を作っている。

英訳によって、孫たちが俳句を理解してくれたと喜びながらも、無理して読ませたいのではなく、「もし読んでくれるなら」という姿勢である。数句あげると、

「夏帽子うなじに揺れるイヤリング　Summer hat, napes of neck, swinging earrings.」

「手を通す紅絹の感触秋すずろ　I place my arms through red silk sleeves and feel the sudden coolness of autumn.」

「ワシントン虎の尾生けて薄茶会　In Washington arranged tiger-tail flowers a gathering for light tea.」

「冬の月連れてドライブ州境　With the winter moon, we drive together to the state border.」

「移民史の昔を今に芋の粥　Like Japanese immigrants *Satsuma-imo* porridge.」

「生国を遠く句の座や寒南天　My country of birth is far but I am happy with each red berry [haiku friends]」

「昨日会い今日は別れの鮎料理　Yesterday we just met, and today we part with ayu for dinner.」スケールの大きな句から、故郷を思うもの、機智にとんだものと、住む世界の広さを知る。

1995年12月12日、ワシントン D.C にある日本大使館の文化センターで、俳句をとり上げたメリランド大学教授の要請を受け、この小冊子を紹介しながら講演をした。

和服は、子や孫に渡り、久しく着ないという。美枝子は旅行や美術館によく出かけたが、車椅子を利用していることもあった。家族のつながりが強く、何かあるごとに遠くの息子たちが家族と共に集まった。

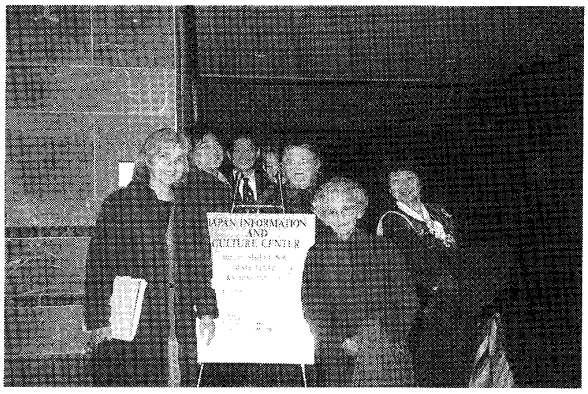


写真２　1995年12月12日　ワシントン D.C
日本大使館文化催し物の会場入口にて

12. むすび

仏教開教使について多くの資料に巡りあったが、ここで詳しく述べる事は避け、ひとつの資料についてのみ書きとめる。

東海女子短期大学紀要第27号の「加齢と衣環境(2) 海を渡った人たち―その１―」で、ジョセフ・ヒコこと浜田彦蔵の記録にかなりの興味を示したが、私を釘づけにしたのは「アメリカ彦蔵自伝２」の最後部であった。「1891年３月18日。東本願寺の講演　私は金杉にある大寺院の一人の住職に連れられて、東本願寺に出かけ、招かれてはるばるインドからやって来たアメリカの陸軍大佐の佛教に関する講演を聞いた。その大佐は70歳くらいに見え、白髪まじりだが、見るからに頑丈で健康そうであった。２人のつうやくが彼の演説をひと区切りずつ翻訳した。講演の主旨は仏僧たちへの忠告であった。大佐は僧侶たちの非行と怠惰な生活をはげしく叱りつけ、僧侶たちはみずからの心を清め、仏陀の宗教を、同国人の間に広めるようにとさとした。さらに進んで、海外に進出して世界のあらゆる国民の間に入り、自分たちの教義を、釈迦の弟子となるためにひたすら僧侶たちの教えを待ち望んでいる人びとに説きあかしてやることこそ、僧侶の務めである。現在のままでも、あの世界一のカトリック教徒たるフランスにおいて、一万二千人の仏教信者がいるし、ア

メリカやイギリスにも数千人はいるのだから、というのであった。大佐の聴衆は千二百人ばかりであった。――とくに招待を受けた俗人が五、六にんほどいたが、ほかは僧侶ばかりであった。」[1)]

大久保清に貰ったカラカウア王の記録の中にもハワイでの仏教伝導の要請の話があった。

この二つの記録は、美枝子の人生を変えた遠い要因であると、私は考えた。そして次々と資料にぶつかることになった。

私はここ2年、冬になると和服で出勤している。結婚した時持って来た物ばかりで、究極のリホームである。歩いていると足元で衣擦れの音がする。豊かで幸せな気分になる。洋服より保温性が高く、室内の温度は5℃低くて良い。雪の日はモンペをはいて出勤した。87歳の母は下駄や草履が不安定で和服を着られないという。そのことを美枝子に伝えた時「若い頃、和服に靴を履いていました。お母様もそうされたら」と答えが返ってきた。

美枝子が日本のテレビ放送「秀吉」の中での簑笠姿を見て、まだ揖斐郡にいた昭和のはじめ、農家の人々の雨具はこれだった、となつかしく書いていた。秀吉の時代から長い間変わらなかった服装が急速に変化したことに、自分の事も含めて興味を示していた。

和服から洋服に移った事と、農業社会から工業社会に移行した事は、大きな因果関係にある。現在の衣服の形がもう変わらないとは断言出来ない。情報化時代になって、モバイルウェアなどのファッションショウも見られる。アンテナのくみこまれた帽子も、アニメの世界だけではなくなった。

彼女の手紙は、自身のことよりも大きな足跡を残した郷土の人々に触れることが多く、その時は特に筆が進んだ。こんな事を知っているかとか資料を調べてみるといいとか、知っていて欲しいという姿勢が感じられ、故郷が遠くにある人の心がまぶしかった。貴重な提言と資料を貰っているがテーマと直接関係が無いので、数項目だけ列挙しておく。

- 光慶寺に残る南條文雄と学寮（皆山楼）の資料について
- 三分紀行について
- 北海道開拓使と揖斐郡の人々の移住について
- 道教・道貫（光慶寺出身）の功績について

この拙論では「由上美枝子の年表」がポイントである。ご助力頂いた方々に感謝の意を表したい。

由上美枝子は2001年6月に帰らぬ人となった。研究室で突然の訃報を聞いた。虚無感はいまだに拭われない。

引　用

1）アメリカ彦蔵自伝2　中川努　山口修訳　平凡社　1964年　P.267

参考文献

・日本民族海外発展史　斎藤栄三郎著　平成10年12月18日
・The Japanese in Hawaii: A Century of Struggle
・ハワイの日本人・日系人の歴史上巻　渡辺礼三著　ハワイ報知社
・第五回全国俳句大会入選句集　平成5年　大垣市
・評伝清沢満之　脇本平也著　法蔵館　平成57年
・大叔父鈴木大拙からの手紙　林田久美野　法蔵館1995.7.12
・鈴木大拙の人と学問　鈴木大拙禅選集別巻　春秋社　1992.7
・三分紀行　稲葉栄壽　昭和4年（非売品）
・今日限りの命と志らず鶏も網の中にて時唄ふなり　松雨　昭和4年4月（非売品）
・終わりなき求道の旅　海を越えてお念仏を伝えて由上正道先生の遺稿集　真宗大谷派雨広山広円寺内　昭和62年
・女たちの太平洋戦争②　朝日新聞社　旭文庫　1997.
・真宗の風景　北国新聞社編　同朋舎出版　1990.
・親鸞のあしあと　新妻久郎　朱鷺書房　1998.
・原始仏教　中村元　NHKブックス(1)　1993.
・思い出の小箱から ―鈴木大拙のこと―　岡村美穂子・上田閑照著　燈影撰書
・大拙の風景 ―鈴木大拙とは誰か―　岡村美穂子・上田閑照　燈影撰書20　平成11年